



©2017 国立大学法人北海道大学

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザインⅠ
第20回ファースト・ステップ・プログラム（FSP）欧州
全体報告書
2017. 9. 13～9. 25



目 次

1. 「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）： グローバル・キャリア・デザイン」 通称：ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは	p. 2
2. 参加メンバー紹介	p. 4
3. 日程表	p. 6
4. 準備授業【海外研修前】	p. 8
5. 事後授業【海外研修後】	p. 9
6. 企業等及び協定大学訪問【海外研修中】 IBM Research, Ireland 岸本 章宏様 在アイルランド日本国大使館 山田 有一様 パトリック・ブローフィ様 アイルランド国立大学ダブリン校社会科学・法学部 小館 尚文様 アイルランド国立大学ダブリン校 アアルト大学 トゥルク大学 北海道大学欧州ヘルシンキオフィス副所長 岡部 赳大様 KONE Oyj Ikue Valovirta 様 日本貿易振興機構 前園 香織様	p. 10
7. アンケート	p. 20
8. 終わりに	p. 22
9. 謝辞	p. 22
10. 編集後記	p. 23

1. 「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン」通称：ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは
全学教育科目のひとつ、「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン」は、海外協定校等の教育機関での授業体験や学生との交流、国際機関や国際的に展開している企業の現場見学、及び海外で勤務する方々との対話などを短期間に体験する機会を提供します。このプログラムは、学生にとって交換留学、語学研修、国際インターンシップやボランティア等、本学内外で実施される様々な海外プログラムに挑戦する最初の一步となることを目的としています。科目を開発する段階では、海外に向けての第一歩という意味を込めて、「ファースト・ステップ・プログラム」という名称を使っていたので、現在、通称を「FSP」としています。

プログラム参加を通して、学生がグローバルなキャリアについての視野を広げ、計画性をもって、将来的にグローバルだけでなく、日本の国内でも活躍するような「グローカル」な人財として育っていくことを目指しています。

[HP(北大生のための留学ガイド)より抜粋]

【以下、本授業科目をFSP、今回のプログラムを第20回FSP 欧州とする。】

・応募資格

- ・北海道大学に在籍する原則学部1, 2年生
- ・留学や国際協力、国際交流等に高い関心をもっており、在学中に交換留学、語学研修、国際インターンシップ/ボランティア等の海外で実施するプログラムへの参加を考えている学生
- ・協定大学等との学生交流や講義受講に必要な基本的な英語能力を有する学生 (TOEIC400点、TOEFL iBT41点、TOEFL ITP 437点、英検準2級、国連英検C級以上の英語力を必要とします)
- ・海外留学経験のない、または少ない学生を優先
- ・他の参加者と協調して主体的にプログラムに参加する意思をもっている学生
- ・原則、準備授業（5回程度）及び事後授業（3回程度）を必ず受講できる学生
- ・原則、北海道大学での在学期間中及び卒業後も、本プログラムの評価や広報活動に積極的に協力できる学生
- ・訪問国での活動に心身ともに支障がない学生

[HP(北大生のための留学ガイド)より抜粋]

・実際に参加したからこそ感じたFSPの特徴

今回、第20回FSP 欧州に参加したからこそ感じたFSPという授業科目の特徴を大きく2点に分けて紹介します。

1 つには、FSP における様々な場面において社会人としてのマナーを身につけることができるという点にあります。様々な場面とは、引率者の先生方とメールでやりとりをするとき、企業等訪問でご講話を拝聴するとき、帰国後に報告書や訪問先の方々に対してお礼状を執筆するときなどが挙げられます。いずれの場合においても、言葉遣い・身だしなみ等、普段あまり意識することのない目上の方々に対するマナー・礼儀をきちんと守らなければなりません。このようなマナー・礼儀に関しては引率者の先生方から時には厳しいお言葉もいただきながら自分のものとしていく必要があります。しかし、FSP に比べて海外研修前の授業が少ない他の海外プログラムでは決して得られないものです。

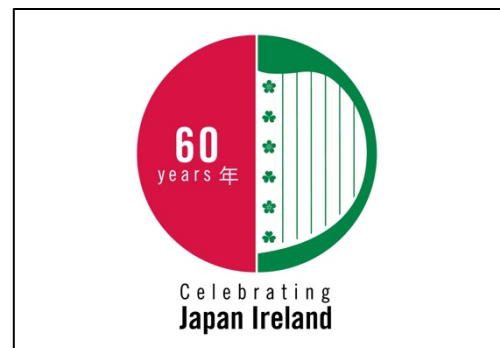
次に、集団行動についてです。北海道大学が主催している FSP 以外のプログラムでは基本的に海外での宿泊先は一般家庭・学生寮などですが、FSP では参加者全員が同じホテルに宿泊し、現地での行動も基本的に全員もしくは 2 人以上のグループ単位で行われます。つまり、海外でトラブルや課題に遭遇したとき、互いに助け合える仲間が必ず隣にいてくれるということです。この報告書の 7. アンケートでも実際に参加メンバーが経験した海外でのトラブルをいくつか紹介していますが、第 20 回 FSP 欧州において大きな問題が起これなかった一つの要因として集団行動という特徴が挙げられることは間違い無いと感じています。

以上 2 点が実際に参加したからこそ感じた FSP の特徴です。

・訪問国について

第 20 回 FSP 欧州の訪問国がアイルランド・フィンランドに決定した裏側にはいくつかの理由が存在します。

まず、アイルランドについて。今回の第 20 回 FSP 欧州プログラムは「日・アイルランド外交関係樹立 60 周年記念事業」として認定されています。



日・アイルランド外交関係樹立 60 周年記念事業ロゴ

また、フィンランドについては、北海道大学の海外オフィスの一つ北海道大学欧州ヘルシンキオフィスが存在することもあります。そのほかに今年が同国の独立 100 周年という記念の年であるということで第 20 回 FSP 欧州の訪問国に選ばれました。

・その他

はじめに費用について、今回の第 20 回 FSP 欧州の場合、全額自己負担で約 35 万円の参加費用が必要となります。

また、奨学金情報について、書類等による審査を受け認められると日本学生支援機構様 (JASSO) から 8 万円の奨学金をいただくことができました。加えて、北海道大学フロンティア

基金新渡戸カレッジ（海外留学）奨学金の制度を利用することも可能でした。

- (1. 「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン」通称：ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは 文責：川崎 嵩）

2. 参加メンバー紹介

第20回 FSP 欧州では参加メンバー18名が4つの班に分かれ、班ごとに振り分けられた仕事をこなすことで、第20回 FSP 欧州における自分の役割を認識することができました。

4つの班はそれぞれ、総務企画班・企業訪問班・プレゼンテーション班・記録広報班です。以下、それぞれの班のメンバーを写真とともに紹介します。

総務企画班

《写真左から》



豊邊 萌（全体リーダー）

薬学部2年

佐々木 嵩

工学部2年

高橋 大雅（サブリーダー）

医学部1年

溝端 真奈

水産学部1年

企業訪問班

《写真左から》

脇村 りん

経済学部1年

島田 実歩

理学部1年

林 沙弥香

総合理系1年

坂坊 亮直

法学部1年



プレゼンテーション班

《写真左から》



笠原 ゆかり
法学部 1 年
大津 留実
水産学部 2 年
大泉 翼
工学部 2 年
木藤 貫志
経済学部 2 年

記録広報班

《写真左から》

内藤 樹
工学部 2 年
川崎 嵩
総合理系 1 年
磯崎 大希
医学部 1 年
稲垣 伊織
総合理系 1 年
中野 思穂
教育学部 1 年
山本 裕之
工学部 2 年



(2. 参加メンバー紹介 文責：川崎 嵩)

3. 日程表

2017年 第20回 FSP 欧州 日程表

日次	日付	都市	行程
1	9/13 (水)	新千歳～ダブリン	新千歳空港発、成田空港経由でヘルシンキへ さらにヘルシンキからダブリンへ移動
2	9/14 (木)	ダブリン	マラハイド城を訪問・見学 その後、マラハイドまたはダブリンにて訪問国調査活動 (*1)
3	9/15 (金)	ダブリン	終日 在アイルランド日本国大使館様会議室にて 《企業等訪問》 IBM Research, Ireland 岸本 章宏様 在アイルランド日本国大使館 山田 有一様 パトリック ブローフィ様 アイルランド国立大学ダブリン校社会科学・ 法学部 小館 尚文様
4	9/16 (土)	ダブリン	午前 振返り MTG① (*2) 【ホテルで実施】 午後 訪問国調査活動 (*1)
5	9/17 (日)	ダブリン	終日 訪問国調査活動 (*1)
6	9/18 (月)	ダブリン	終日 アイルランド国立大学ダブリン校訪問 大学紹介、キャンパスツアー、ランチ、学生交流
7	9/19 (火)	ダブリン ～ヘルシンキ	午前 国立考古学・歴史博物館、アイルランド国立美術館、 国立自然史博物館等を訪問・見学、ランチ 午後 ダブリン→ヘルシンキ
8	9/20 (水)	ヘルシンキ	アアルト大学訪問 大学紹介、キャンパスツアー、学生交流 夜 ヘルシンキ大学研究者の方々と市内レストラン で懇親会
9	9/21 (木)	トゥルク	午前 トゥルク市内散策 午後 トゥルク大学訪問

1 0	9/22 (金)	ヘルシンキ	終日	ヘルシンキ大学教室にて 《企業等訪問》 北海道大学欧州ヘルシンキオフィス副所長 岡部 赳大様 KONE Oyj Ikue Valovirta 様 日本貿易振興機構 前菌 香織様 日本航空株式会社 松倉 弘明様
1 1	9/23 (土)	ヘルシンキ	午前	振返り MTG② (*2) 【第 1 回事後授業・ホテルで実施】 午後 訪問国調査活動 (*1)
1 2	9/24(日)	ヘルシンキ～ 機中泊	午前中	訪問国調査活動 (*1) 午後 ヘルシンキを出発 機中泊
1 3	9/25(月)	機中泊～ 成田～ 新千歳	早朝	成田空港到着、その後羽田空港へ移動 羽田空港到着、新千歳空港へ向けて出発 新千歳空港到着 新千歳空港にて解散

*1 訪問国調査活動：学生が訪問国に関する独自のテーマを定め、現地の方々との交流や聞き取り、関連施設見学等を通して調査を行う活動のこと。

*2 振返り MTG:海外研修を通じて得られた発見を参加メンバーと共有し、その後の活動に活かすために行われるミーティングのこと。

(3. 日程表 文責：磯崎大希)

4. 準備授業【海外研修前】

準備授業は6月中旬から8月にかけて計5回行われ、海外研修に臨むにあたって必要となる知識、情報について参加メンバーと共有したり、キャリアデザインに関して国際連携機構国際教育研究センター 肖蘭先生にお話をいただいたりしました。また、この準備授業は夏季に同時開講されていた第21回FSPアジアプログラムと合同で行われました。

第1回準備授業では、主にFSP担当教職員の方々の紹介、授業概要についての説明、参加メンバー同士の自己紹介などを行いました。これから共に学ぶ仲間との初めての対面にやや緊張していた参加メンバーですが、自己紹介などのアイスブレイクはお互いを知る良いきっかけとなりました。

続く2回目の準備授業では、海外研修に向けての英語学習法指南や訪問国に関する知識についての講義が行われ、海外研修に向けての準備が本格的に始まりました。また、参加メンバーの班分けも行われ、第20回FSP欧州での自分の役割が決まったとても重要な瞬間でした。

第3回準備授業では「キャリアデザイン」について肖先生からお話いただき、この授業科目の大きなテーマである「キャリアデザイン」について理解を深めると共に、改めて自身のキャリアについて思いを巡らせました。また、自分とは異なる文化を持った方たちとのコミュニケーションや異文化理解についても講義をしていただきました。

翌週行われた第4回準備授業では、海外において自分の身を守るために必要な知識・情報の確認が行われ、その他にも日本とは異なる海外の文化や慣習について学びました。また、海外研修中に起こりうる2つの非常事態についてケーススタディを行い、問題解決にどのような対策・考え方が必要となるのかグループに分かれて議論しました。

最終回となる第5回準備授業では、主にプレゼンテーション班による海外での大学訪問の際に行うプレゼンテーションの発表が行われました。プレゼンテーション班以外の参加メンバーは「良い聴衆の条件」について考え、プレゼンテーションに対してフィードバックを行いました。



プレゼンテーション班による発表

(4. 準備授業 文責：川崎 嵩)

5. 事後授業【海外研修後】

事後授業とは、海外研修を通して得られたものや海外研修における気づきについて参加メンバー同士で意見を交換し、体験から学んだことを共有するために行われるものです。

第一回事後授業は海外研修期間中の9月23日に、ヘルシンキ市内のホテルにて行われました。授業では、「FSPだからこそ得られたもの」「第20回FSP欧州だからこそ得られたもの」について参加メンバー一人一人が自分の意見を発表し、挙げられた意見についてさらに他のメンバーが意見を出すなど活発な議論が行われました。授業中に挙げられた意見としては、「ヘルシンキ市内で行われた懇親会で自分のやるべきことが見つかった。英語を話さなくてはいけない環境に身をおけたのは貴重な経験で刺激を受けた。」や、「自分は人と話すのが苦手であったが、第20回FSP欧州では団体行動を経験することで自信がついた。」「自分の英語能力の低さを痛感した。日常的な英語だけでなく自分の専門分野の英語についても学ばなければいけないと思った。」などが挙げられました。

第二回事後授業は10月18日に北海道大学国際連携機構にて、第21回FSPアジアプログラムと合同で行われました。内容は、はじめに第20回欧州・第21回アジアの記録広報班による帰国報告会プレゼンテーション練習発表が行われ、その後3,4人のグループに分かれてFSPを終えた後の自身のキャリアプランについて意見交換を行いました。

プレゼンテーション発表では記録広報班以外の参加メンバーに聴衆としてプレゼンテーションに対するフィードバックを行ってもらいました。記録広報班はこのフィードバックシートを元にプレゼンテーションを改良することになります。

後半のグループワークで配布されたワークシートには長期的なプラン・短期的なプランの2つについて記入する欄があり、海外留学や海外での就職といった目標を達成するために「今やるべきこと」を明確にし、話し合う必要がありました。私のグループでは、「留学に必要なTOEFLやIELTSのスコアを取得する」、「後期から国際交流科目を履修し、英語に触れる機会をつくる」などの具体的な行動について意見を交換しました。



記録広報班による発表

(5. 事後授業 文責：磯崎 大希)

6. 企業等及び協定大学訪問【海外研修中】

IBM Research, Ireland 様 岸本 章宏 様

岸本様によると、IBM Research, Ireland ではコグニティブ IoT、コグニティブ統合ヘルスケア、インタラクティブ推論、データセントリックコンピューティングなどさまざまな分野で研究だけでなくダブリン大学の研究者の方々とも共同プロジェクトも行われているとのことでした。例えば、近年、コグニティブアシスタントという技術が注目を集めています。コグニティブアシスタントの利用例には、自動車の運転補助があります。車に搭載された「アシスタント」と呼ばれるコンピュータが、過去のデータや車内や車外から運転中に得られる情報に基づき、目的地に着くまでに起こりうるリスクを自動的に予測します。このリスク予測に基づき、運転手と対話しながら、手助けを行います。このような研究が日々行われているそうです。

岸本様がコンピュータの世界に関心を抱き始めたのは小学生時代だそうです。そこからご自身の興味のあるものへ突き進んでいくと本当にやりたいことは海外にあることに気づいたといいます。そこで、その分野で最先端であったカナダの大学院へと進むことを決意されました。大学院での奮闘、研究者として海外で活躍されている現在といった、自らのご経歴から海外留学時の失敗や成功の秘訣などもお話ししていただきました。自分の勝てる分野で勝負していくこと、



ご講話の様子

と、自分が学びたい分野の最先端が日本にあるのならば、無理をして海外留学する必要はないということなど、留学に対して具体的に考えるきっかけとなるような貴重なお話でした。

大学院留学のための準備や留学に必要なこと、留学中の心境や留学する際のアドバイスなど、岸本様の実体験を拝聴することで自分のすべきことが具体的にわかるようになりました。特に印象的だったのは、「(英語力が) ネイティブになる必要はない。ネイティブになれない中でどう戦っていくかが大事。」というお話でした。留学では英語力とともに、周囲から一目置かれるようなスキルがあることも大事だということも教えていただきました。

(文責：稲垣 伊織)

在アイルランド日本国大使館様 山田 有一 様

在アイルランド日本国大使館はアイルランドに暮らしている日本人の方々へのサポートや、日本の良さをアイルランドの人たちに知ってもらうための広報文化活動等を通して、日本とアイルランドの橋渡しをしております。2017年は日本とアイルランドの外交関係樹立60周年の年ということで、狂言の舞台を上演するといったようなイベントを数多く行っておりますということでした。



山田様・パトリック様との記念写真

ご講話では、山田様のご担当業務である、広報文化活動についてご説明いただいたのち、これまで国内外でご活躍され、それぞれにおける職務内容やたくさんのご経験から分かったことなどについて、その時々のご自身の心情もあわせて教えていただきました。

山田様は、海外でお仕事をしてきて大きく4つのことに気づくことができました。1つ目は世界には「東西の違い」の他にたくさんの軸が存在し、多面的であること。2つ目は人はお互いに異なる宗教や考え方を持っていること。3つ目は何事も体験が大切であること。4つ目は異文化の中でも「普通に話す」ということが大切だということ。私は、この4点は異国の人と偏見をもたずに接する上でとても大切なことだと感じました。また、アイルランドで日本の広報活動を行っているお話を聞き、日本という国がアイルランドで人気を持ち始めていることに驚きました。留学など、海外に出たときに日本に興味を持ってくれる人と会うこともあると思います。そのときのために他国の人に日本の良さ、伝統文化を説明できるようになっておくことはとても大切なことなのではないかと感じました。

(文責：稲垣 伊織)

在アイルランド日本国大使館様 パトリック ブローフィ 様

「How to deal with culture shock」と題して、海外で生活していくうえで誰もが経験する、カルチャーショックへの対処法をお話していただきました。ご自身も日本でドーナツを購入されようとしたときに、あんドーナツにカルチャーショックを体験されたそうです。(アイルランドではドーナツといえば中にはジャムが入っているため)そんな自らのご経験を例に、具体的な対処法をお話していただきました。



ご講話の様子

カルチャーショックには4つの段階があり、①新鮮に感じる、②不安・憤りを感じる、③慣れ始める、④新しい環境が自分のものになる、の4つであるというお話がありました。そのお話を聞き、ちょうど②の不安を抱え始めていた参加メンバーは、いずれ④の自分のものになっていくものなのだと、考えることができ気持ちになりました。カルチャーショックを経験したときには、不満を言い合える友達を作る、留学した目的や理由を書き出してみる、おいしいものを食べるなど、なるほどと思うような対処法を教えてくださいました。参加メンバーにも理解しやすい英語で、ジョークも織り交ぜながらお話していただいたのでリラックスして拝聴することができました。

また、在アイルランド日本国大使館では、終日、第20回FSP欧州のために大使館の一室をおかしいだいたり、お菓子や飲み物をご用意いただくなど、大変お世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

(文責：稲垣 伊織)

アイルランド国立大学ダブリン校社会科学・法学部 小舘 尚文 先生

小舘先生は、比較社会政策（特に医療安全、社会・福祉サービスの比較など）をご専門とされており、アイルランド国立大学ダブリン校の社会政策・社会福祉・社会公正学科専任講師としてご活躍されています。

「これまでの軌跡：留学と海外キャリア」と題して、ご自身の日本における大学生活、海外へ飛び立つようになったご経緯、海外留学中の思い出・失敗談、留学をするということのメリットなどをお話いただきました。海外留学ではこれまでにないほど楽しいこともあったし、苦しいこともあったということでした。そんな苦しい経験も貴重な経験であり、キャリアを形成していく上では財産となる、と教えていただき、留学への不安を少し減らすことができました。中でも印象に残ったのは、「キャリアは思い描いた通り、には行かないかもしれないが、希望や夢を持つことはとても大切。キャリアとしては意外な方向に進んでいっても、興味を持ってやってきたこと、得意なことは生かせるはず。」というお言葉です。今のうちにいろんなことにチャレンジして興味のあるもの、得意なものを探していくことが自分の武器になるのだ、ということがわかりました。また社会科学をご専門とされており、その研究の内容や他学部との共同研究のことについてもお話をいただき、研究の様子を部分的に知ることができました。

また、ご講話を通して(単なる語学研修ではなく、学部や修士・博士レベルでの専門分野を



ご講話の様子

学ぶための)海外留学はまたとない貴重な時間であり、友人や恩師との出会い、コミュニケーション能力の向上などグローバル・キャリアを積むうえでメリットがたくさんあるのだということを教えていただきました。小舘先生の留学生活での思い出を生き生きとお話する姿に、自分も近い将来このように充実した留学生活を送りたいと強く思うようになりました。また、専門分野である社会科学の研究のお話では、理工系女性の支援制度や介護ロボットに関する研究などで医学部を含む理系学部と共同研究するというお話がありました。今まであまり触れたことのなかった社会科学という学問の研究についても知ることができ、キャリアの選択肢を広げることができました。

(文責：稲垣 伊織)

アイルランド国立大学ダブリン校(以下 UCD) 訪問



UCD に関するプレゼンテーションの様子

UCD は 1854 年に創立され、経済学部、工学&建築学部、芸術&人文科学学部、保険&農学部、理学部、社会科学&法学部の 6 つの学部を持つ、アイルランドで最も大きく国際的な大学とのことです。創設者ジョン・ヘンリー・ニューマンは大学教育の重要性というものに早期から気づき、世界に広がる膨大な知識における発展や必要を満たすことを重要としましたそうです。近年、ヨーロッパの経済学部で優れた大学調査で 1 位を獲得しており、アイルランドでの

教育の質を決定する調査で、30 科目中 12 科目の分野で 1 位を獲得しているとのことでした。UCD は北海道大学の協定校ですが、現在は学生交流の覚書はまだ締結されておらず、学術交流協定のみ締結されています。

訪問時にはまず、国際部の職員の方から大学紹介をしていただきました。同大学が、世界における上位 1% の高等教育機関であること、アイルランド国内における QS 世界大学ランキングにおいて 1 位であることや、教育学士号・修士号・博士号のシステム、マップを用いて簡単な建物の位置などをご説明いただきました。次に、UCD の学生さんが実際にキャンパスを回って各学部の建物や、学生の居住スペースを案内してくださいました。その後、何名かの学生さんとランチをご一緒させていただきました。その際、UCD のご担当者の方々がサンドイッチやフルーツなど、第 20 回 FSP 欧州のために無償で用意してくださいました。手厚いおもてなしをいただきまして本当にありがとうございました。最後に、アイルランド国立大学 Applied Language Centre



学生交流の様子

日本語コーディネーターの伊地知伸子先生の日本語クラスを訪問させていただき、日本語と英語を使って履修者の皆様とお話しました。

この日が第20回FSP欧州で初めての学生交流ということもあり、参加メンバー全員、はじめは緊張していましたが、自分の英語が通じたり、なんとか相手の英語が理解できたりして、徐々に楽しむことができました。それと同時に自分の言いたいことが英語ですぐに出てこないもどかしさを痛感することもありました。また、伊地知先生の日本語クラスを訪問させていただいた際には日本語がとても上手な学生の方おり、海外の学生の学力の高さに大変驚きました。この刺激が参加メンバーにとって英語をはじめ、大学での勉強へのモチベーションが高まるきっかけとなったのではないかと思います。

(文責：稲垣 伊織)

アアルト大学 訪問



アアルト大学キャンパス内での集合写真

アアルト大学は、2010年にヘルシンキ工科大学・ヘルシンキ経済大学・ヘルシンキ美術大学の3つの大学が合併して設立された比較的新しい大学であり、芸術・デザイン・建築学部、化学工学部、ビジネス学部、電気工学部、工学部、理学部の六つの学部からなると教えていただきました。大学名はフィンランドを代表するデザイナーであるアルヴァ・アアルトに由来しているそうです。同大学は北海道大学の協定校であり、交換留学も行われています。加えて、EUもしくはEEA（欧州経済領域）出身の学生は授業料が無料であるという特徴があることも教えていただきました。

訪問時には現地学生も使用しているカフェテリアで昼食を取らせていただいたのち、アアルト大学について職員の方からプレゼンテーションをしていただき、その後キャンパス内を案内していただきました。プレゼンテーションでは高い教育水準を誇る同大学で行われている取り組みの一つとして、「Slush」という起業家・投資家向けの世界規模スタートアップイベントの開催が挙げられました。グローバル社会で活躍する人材を生み出そうとする大学の姿勢・企業立国を目指して成長し続けるフィンランドという国の様子をうかがうことができました。また、キャンパスツアーでは洗練された施設のデザインや、無料で使用できる実験室など北海道大学とは異なる設備の数々に驚かされました。

訪問の終盤には、プレゼンテーション班所属の学生が北海道大学についてプレゼンテーションを披露する時間もあり、アアルト大学の学生に留学先としての北海道大学の魅力を発信

できたと思います。その後、総務企画班が企画した日本文化に関するクイズを行いました。学生交流に参加していただいた学生の多くが日本文化に興味を抱いており、中には非常に日本語が堪能な方もいらっしゃいました。彼らがフィンランドから遠く離れた日本という国について多くの知識を持っていることには驚かされましたし、何より私たち第20回FSP欧州参加メンバーの海外諸国に関する知識の不十分さを思い知るきっかけになりました。

(文責：川崎 嵩)

ヘルシンキ大学 Vikki キャンパス研究者の方々との懇親会

ヘルシンキ市内レストランにて、現在ヘルシンキ大学 Vikki キャンパスにおいて研究者として勤めていらっしゃる、新見修先生、千住洋介様、竹下大介様、梅森十三様と夕食をご一緒させていただきました。

懇親会では、海外の大学で活躍されている4名の方々の研究テーマや、学生時代のご様子、フィンランドでの生活などに関するお話を拝聴することができました。懇親会ということで研究者の方々に近い場所で直にお話を拝聴することができ、企業等訪問とはまた違った意味で「海外で働く・研究する」ということの難しさを知ることができました。



懇親会の様子

私は主に新見先生のお隣でお話を聞いていたのですが、お話の中でも特に「英語」に対する新見様の考え方が印象に残っています。現在ヘルシンキ大学においてショウジョウバエを用いて発生生物学に関する研究を行っていらっしゃる新見様ですが、学生時代は英語があまりお得意ではなく、留学に行かれる前もご自身の語学力に不安があったとお話してくださいました。しかし、同時に「日本人がネイティブスピーカーのように英語を使えるようになる必要はない」という考え方から、文法上の間違いを恐れず積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとしたというご経験を語っていただきました。また、英語の学習法として、ただ文章を読み発音を繰り返すのではなく、一度自分の手で文章を書き写してみることによって、よく使われるフレーズや言い回しが頭に入りやすくなると教えていただきました。加えて、学部時代に留学した人と大学院または社会人で留学した人の英語力には大きな差が出ることも重要なことだとおっしゃっていました。このようなお話は自分の英語学習法に疑問を抱いていた私にとって大変貴重なアドバイスとなり、学習に対するモチベーションも向上しました。

(文責：川崎 嵩)

トゥルク大学 訪問



ディスカッションの様子

トゥルク大学はフィンランドで二番目に大きい大学として知られており、現フィンランド大統領サウリ・ニーニストの出身校とのことです。またアアルト大学と同様に、EU もしくは EEA（欧州経済領域）出身の学生は授業料が無料であるという特徴があることも教えていただきました。個別の指導員制度や 300 以上もの英語による授業コースなど留学生に対するサポートも大変充実しているようで、北海道大学の協定校であり、2015・2016 年に北海道大学へ交換留学生を送ったとのことでした。

大学訪問時には、今回の訪問をコーディネートしてくださった Ms. Konttinen や Professor Paltemaa にトゥルク大学や CEAS（Centre for East Asian Studies）という研究センターについて紹介していただいたあとに、「Taotao」と呼ばれるクラブに所属し、東アジア文化について CEAS に所属して学んでいる学生に「Taotao」についてプレゼンテーションをしていただきました。「Taotao」のメンバーの方にはご厚意でランチを通常よりも安く提供していただくなど大変お世話になりました。感謝申し上げます。また、場所を移して行われた現地学生（Taotao 所属以外の学生を含む）とのディスカッションではフィンランドと日本の大学の違いについて意見を交わしました。日本人学生からフィンランドの大学に対して「女性学生の割合が高い」や「大学の敷地が広く、施設のデザインが凝っている」、「学習が常に個人単位で行われている」などの印象をもったことが語られた一方で、フィンランドの学生は日本の大学に対して「常に忙しそう」、「クラブ活動が盛ん」といったイメージを抱いていることがわかりました。また、プレゼンテーション班の学生から北海道大学についてプレゼンテーションを披露させていただきました。学生交流終盤では参加メンバー全員が現地学生と打ち解けた様子で談笑し、帰国後も連絡をとることができるようにお互いの連絡先を交換しました。

（文責：川崎 嵩）

北海道大学 欧州ヘルシンキオフィス 副所長 岡部 赳大 様

岡部様には、ヘルシンキ到着後から引率という形で第 20 回 FSP 欧州の学びをサポートしていただいただけでなく、ヘルシンキ大学内にある北海道大学欧州ヘルシンキオフィスの案内もしていただきました。

岡部様は現在、北海道大学の海外オフィスの一つ、北海道大学欧州ヘルシンキオフィスの

副所長として勤務され、北海道大学とフィンランド国内の協定校との交換留学生、欧州・ロシアで研究されている北海道大学研究者の支援を行なっていたとのことでした。また、ヘルシンキ大学においてソ連とフィンランドの関係について研究が続けられていることを教えていただきました。

ご講話の中では、同オフィスの活動やご自身の研究、フィンランドの教育についてご紹介いただきました。北海道大学欧州ヘルシンキオフィスの仕事としては「北大デイ」というイベントを開催し、欧州の各大学で北海道大学について紹介を行う、また北海道大学内で「フィンランドデイ」というイベントを開催していることなどが挙げられました。このような活動の成果として、フィンランドは欧州の中で小国であるにもかかわらず日本からの交換留学生の数が年々増加しているそうです。



参加メンバーより御礼の品をお渡ししました

そのほかにもフィンランドでの生活や教育システムについてご講話いただきました。特に印象に残っているのはフィンランド人の個人主義の徹底についてで、例えば「保育所などで子供が1人遊びをしても仲間と遊ぶように強制しない」や「学校の授業では生徒一人一人の学習ペースを尊重し、留年などの措置は日本よりもポジティブなものとして受け入れられている」などのエピソードが挙げられました。よく日本人と似ていると言われるフィンランド人ですが、実は日本人とは全く異なる価値観・考え方を持っていることに気づくことができました。

(文責：川崎 嵩)

KONE Oyj 様 Ikue Valovirta 様

Valovirta 様は、エレベーターやエスカレーターなどの建物内の移動に用いられる機器を製造・開発している KONE Oyj 様において社内広報を担当していらっしゃいます。同社のエレベーターは世界的にも非常に有名で、サウジアラビアの超高層ビル「ジッダタワー」、シンガポールの高級総合リゾートホテル「マリーナ・ベイ・サンズ」など名のある建造物の多くに採用されていることを伺いました。

Valovirta 様のご講話では主に、KONE Oyj 様という企業について、その取り組みと Valovirta 様のご担当職務に関する説明、そして Valovirta 様の海外経験についてお話し



Valovirta 様との記念写真

していただきました。

幼少期から英語、そして世界に興味を抱かれてきた Valovirta 様の体験談は自信に満ち溢れたものであり、これから世界で活躍したいと考える私たち参加メンバーにとって大きな指針になり得るものでした。特に英語の習得に関して「言語を学ぶコツ」として教えていただいた「子供が一番の先生・現地人の真似をする・海外の映画やテレビは字幕で見る」という3つのコツは私たち参加メンバーにもすぐに実践できるもので、これからの語学学習に非常に役に立つものであったと思います。また、高校、大学と留学を経験された Valovirta 様の「経験が浅くても学ぶ姿勢が大切である。」や「今、目の前にあることを一生懸命にやる。期限付きのゴールを定めない。」というお言葉は非常に重みのあるもので、私たち参加メンバーの心に深く残りました。

(文責：川崎 嵩)

日本貿易振興機構(以下 JETRO) 様 ヘルシンキレスポンドント 前菌 香織 様

前菌様は大手広告代理店に勤められ、旅行会社に転職されたのち、現在は JETRO 様の特派員として勤務されています。

JETRO 様は主に海外企業の日本への投資と日本からの輸出促進を目的に経済産業省の管轄下で活動を行なっている独立行政法人だと教えていただきました。

今回のご講話では、まずは JETRO 様の活動に関する説明や前菌様がこれまで歩んで来られた道のりについてお話しいただき、その後は日本人と外国人の間に起こりうる問題についてグループに分かれてケーススタディを行いました。

前半のご講話では、周りの常識にとらわれず自らの意思で行動を起こす前菌様の体験談がとても印象的で、「上役の秘書に就くことを拒否された」ご経験や、「周りの反対を押し切って退職を決意なされた」ご経験などから、一つの考え方にとらわれず自分の信念をしっかりと持つことの重要性を学ぶことができました。

後半のケーススタディでは、グループ毎に異なるシナリオが配布され、それぞれ与えられたケースについて何が問題点となっているのか、文化の違いをどのように埋めるのかについて議論しました。いずれの問題も外国人と日本人の考え方の違いから起こる非常に現実的なもので、自分とは異なる文化背景を持った人々との付き合い方について深く考えることがで



ケーススタディの様子

きました。

(文責：川崎 嵩)

7. アンケート

第 20 回 FSP 欧州に参加した学生 18 名に 5 つの質問に答えてもらいました。

以下、回答を一部抜粋してご紹介します。

1. FSP に参加した主な理由はなんですか？

-初めての海外で引率がついていて安心できると思ったから。また、今後の自分のキャリア形成に役立つと思ったから。

-海外への視野を広げることです。また、言語学習の動機付けをするためです。

-海外(とくにヨーロッパ)に行きたかったから。また留学に行きたいが勇気がなかったため。

-将来海外で働くことを考えているが、一度も海外に行ったことがなかったため、海外を味わっておきたいということに加え、現地の方々とコミュニケーションをとり自分の英語力を計るため。

2. 第 20 回 FSP 欧州中の体験談（失敗談も含めて）を教えてください。

-店員さんの英語がわからないのが辛かったです。店員さんに自分から話しかけて、自分の要求が通った時は嬉しかったです。ランチセットに飲み物が含まれていると思って紅茶を注文したらエクストラで3ユーロかかりました。辛かったです。

-信号待ちをしていたとき、珈琲をもった男性の道をふさいでしまっていたので sorry と言ってどけたら、相手が oh, no . Sorry. と逆に sorry と言ってくれ現地の人の温かさを感じた。

-ハンバーガー屋さんでその日が初バイトのかわいい店員さんに会った。拙い英語だったのにすごく親切にしてくれたので、「がんばって！」って伝えたかったけど、どう言えばいいかわからなくて辞書と携帯を使って色々調べた。だけど、どれが今の状況にあっているかわからなくて諦めてなにも言えなかった。

3. FSP で得られたものの中で最も重要であると考えてるものを教えてください。

-アイルランドに対するポジティブなイメージ。絶対 FSP でなければアイルランドに行くことはなかったと思います。

-英語で話しかける自信。

-職業感に関する視野が広がること。

-海外留学へのモチベーション。

-固定観念にとらわれず、積極的に行動すること。

4-1. FSP に参加する前と後で変化したことはありますか？

「ある」18人

4-2. 「ある」と答えた方に質問です。具体的に何が変化しましたか？

- 英語を学ぶこと、海外に出て行くことだけが自分の最善だと思っていたが、日本で活躍することもいいという事。
- 英語の勉強を頑張ろうと思えた。
- 英語に積極的に触れるようになりました。例えばYouTubeで英語の番組を見る、英語の音楽を聴く、単語を学ぶなどです。
- 後期から国際交流科目と多文化交流科目を取りました。課題の英文の量がとても多いですが今のところがんばっています。
- 語学学習への危機感が高まった。

5-1. FSP を後輩に勧めますか？

「はい」16人

「いいえ」2人

5-2. その理由を教えてください。

- モヤモヤしていたものが一つでもクリアになるから。
- 今後の大学生活を過ごすに当たっての意識が変わったから。留学について考える機会になったから。純粋に楽しかったから。
- 外国語が話せることの便利に気づけ、英語学習が楽しくなると思うからです。
- 少なくとも留学に興味のある友達は必ずできるのでモチベーション維持できると思います。
- 社会人としてのマナーや自分の甘さが実感できるため。

(文責：川崎 嵩)

8. 終わりに

はじめに、この報告書に最後まで目を通していただいたことに、心より感謝申し上げます。

わたくしたち、第20回FSP欧州に参加した学生は、無事に全日程を修了し、帰国することができました。これは、引率いただいた方々、訪問先の方々、北海道大学教職員の皆様、そして、ご父兄の皆様ののおかげです。あらためて感謝申し上げます。

さて、今回の研修を終えた参加メンバーが見ている世界は、出発前とは大きく異なっています。海外へ出て、様々な方々とお話をし、そして街の様子、文化の違い、短期研修でありましたが、様々なものを目にして帰ってきました。学生交流で、意識の差に大きな刺激を受け、日々精進しようと意気込んでいます。さらには、海外を見るのではなく、外から日本を客観的に見るという経験もしたような気がしています。国内には経験できないことを経験できた喜びは、とても大きいです。さらに、現地でご活躍されている皆様のご講話を拝聴し、自らのキャリア・デザインの貴重なヒントをいただきました。

今回得た経験を決して無駄にせず、これからの留学、そして海外での活躍への一歩を着実に踏んでいきたいと思えます。

(文責：磯崎 大希)

9. 謝辞

お忙しい中、私たち参加メンバーのためにご講話くださった皆様、訪問を受け入れてくださった大学の教職員の方々、貴重な時間を割き、交流してくださった協定大学の学生の皆様、本当にありがとうございました。

海外研修全行程で私たち参加メンバーの引率をしてくださいました国際連携機構 石倉香理さん、アイルランド滞在期間中の引率をしてくださいました同じく国際連携機構 川端千鶴さん、準備・事後授業や成績評価をご担当いただいた国際連携機構 国際教育研究センター 肖蘭先生、フィンランドでの引率をご担当くださり、ご講話もして下さった、北海道大学欧州ヘルシンキオフィス 岡部赴大副所長、今回のプログラムの運営に携わっていただいた北海道大学 教職員の皆様に、心より感謝申し上げます。

そして、海外研修へ送り出してくださいましたご父兄の皆様、支えあい、切磋琢磨しあった参加メンバーの皆様、本当にありがとうございました。

2017年10月31日

第20回FSP欧州 記録広報班一同

10. 編集後記

このたびは、第 20 回 FSP 欧州全体報告書に目を通していただき、ありがとうございます。

今回の第 20 回 FSP 欧州の報告書の制作の中で、自分を振り返る機会がたくさんありました。報告書を書いていて、その日に、自分は何をしていたのか、どんなことがあったのか、全員で何ができたのか思い出していると、自分は実に様々な経験をしたということを実感します。最初は英語を自分から使えず、様々なことに困っていた記憶から、後の記憶をたどれば、自分は英語を使って自ら問題を解決しています。英語で話す記憶が増えていくと、現地の方と話したり、自ら質問をして様々な経験をしたりと、たくさんのものを経験したことがわかります。このように振り返ることで、自身の経験を、より意味のあるものとして再び記憶することで、自らのこれからは活かすことができそうです。さて、今回作った報告書、そして自分たちが伝える経験が、第 20 回 FSP 欧州でお世話になった方々によって自分たちが経験させてもらったことへの、恩返しとなり、次の FSP に参加しようと考えている学生の皆様のお役に立てることを願っております。

(磯崎 大希)

全体報告書を書き終えて感じたことは、自分がこの仕事に携わることができて本当に良かったということです。それは、この全体報告書が自分たちの学んだことを多くの人に知ってもらうためだけでなく、海外研修中に自分自身が感じたことを形にして残す、という意味もあることが分かったからです。写真だけでもその状況は思い出せますが、その時の気持ちは思い出せません。このような形で、海外研修でさまざまな刺激を受けたときの気持ちを後に見返ることができることは、将来くじけそうになった時の大きな支えとなってくれるはずです。

以上のような思いで編集させてもらったので、この全体報告書が今後 FSP 参加者の方にも、今回参加した仲間にも、お役にたてるようなものになることを祈っています。最後まで読んでくださりありがとうございました。

(稲垣 伊織)

ここまでこの報告書を読み進めてくださり、本当にありがとうございます。読者様の FSP に対する興味・関心を高める一助になれば幸いです。

振り返ればとても忙しく、けれども充実した 2 週間を欧州で過ごすことができました。このプログラムの応募期間は入学したての春であり、自分が何を思って FSP 欧州参加を志願し

たのかはっきりと思い出すことはできません。それでも「あの春の判断は正解だった」と胸を張って誇れる自分は確かに今、この報告書を書き上げようとしています。

記録広報班の仕事は授業全体を通していわゆる「裏方」であり、決してほかの班の方の目に留まるようなものではなかったと思います。しかし、だからといって手を抜くような真似はせず、むしろ楽しみながら仕事をこなす記録広報班メンバーの姿に私は何度も助けられました。班長として至らない点ばかりであったと反省は尽きませんが、いつも笑顔で私の隣を歩いてくれた5人の仲間には感謝の気持ちを伝えたいです。

さて、皆様、どのような思いでこの報告書のページをめくってこられたのでしょうか。

研修を支えてくださった皆様、幾度となくご迷惑をおかけしたかと思いますが、最後まで参加メンバー18名の学びをご支援いただき本当にありがとうございました。重ねてお礼申しあげます。

仲間との思い出が蘇ったという方、さらなる高みを目指してこれからも競い合い、励ましあいながらともに進んでいきましょう。

FSPへの参加を考えているという方、今あなたが想像している以上に学びに満ち、充実した体験があなたを待っています。この報告書があなたの背中を押すきっかけになることを記録広報班一同、こころより願っております。

(記録広報班班長・川崎 嵩)



第20回 FSP 欧州 全体報告書

2017年10月31日

編集 第20回 FSP 欧州記録広報班（全体報告書担当：磯崎、稲垣、川崎、
プレゼンテーション担当：内藤、中野、山本）

問い合わせ先 北海道大学 国際連携機構 国際オフィサー室（国際交流課）

電話：(011)706-8040、8032

E-mail: ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Website: https://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/

Facebook: <https://www.facebook.com/1ststepprogram>

Twitter: https://twitter.com/fsp_hokudai